

幼い頃の話だ。

学校帰りに少女は子犬を拾った。

人目につかない、しかし誰かが気付かないとも言いきれない、そんな家屋と家屋のわずかな隙間に、子犬は小さな箱に入れられ、ひっそりと捨てられていた。捨てた誰かは、子犬を拾ってもらおうとは思っていなかったのだろう。かといって非情に徹するも出来ず、誰かが見つかるかもしれないような、中途半端な場所を選んだのかもしれない。

ペットを手放すなどと言わない。飼ってみて、想像と違ったり、状況が変わる事もあるだろう。それは仕方がない。無理を続けても、やがて破綻する。それは飼い主もペットも不幸になる。

ならばせめて、別の飼い主を探すべきだ。それがペットを飼った者の責任であり義務だから。

無論、当時の少女はそんな事まで考えていなかったが。

拾った子犬はひどく衰弱していた。誰にも見つけてもらえず、餌も与えられず、ずっと放置されていたらしい。

少女は子犬を家に連れ帰った。だが、彼女の両親は忙しくて家におらず、近くの『工房』でいつも機械をいじっていた祖父を頼った。衰弱した子犬を見て、祖父は恐らく助からないと言った。それでも必死に訴える孫のため、祖父は病院へ付き添ってくれた。

しかし、病院は子犬を受け入れてくれなかった。プロが一目で助からないと判断するほど、状態は絶望的だったのだ。祖父はこうなる事を予想していたのだろう。すぐに別の病院へ向かってくれた。だが、何処も同じで、子犬を診てくれる所はなかった。

時間が経つにつれ、子犬の呼吸が弱々しくなっていくのを感じた。撫でた瞬間、体温の低さにゾツとした。少女は慌てて子犬を抱きしめた。温めなければ死んでしまうと思った。

街灯に明かりが灯る頃、最後に訪ねた病院でも、やはり受け入れを拒否された。そこで初めて祖父が獣医に食いが下がった。近場の病院はすべて回って、此処で最後なのだ。獣医は隠す様子もなく、幼い子供でも判るくらい渋々といった表情で、子犬を診てくれた。医者だって、助かる見込みのない患者など診たくないだろう。医者の子を責められたり、騒がれでもすれば信用に関わる。

子犬を受け入れてくれた獣医は態度とは裏腹に、医療の心得などない少女にも

判るくらい、真摯しんしに手を尽くしてくれた。外が完全に暗くなり、診療時間が終了して従業員が帰る時間になっても、彼は帰らなかった。

それでも子犬は助からなかった。

祖父はもちろん、少女も獣医を責めたりはしなかった。獣医は獣医で、迷惑そうな顔をして診療代は頑がんとして受け取らなかった。

翌日、少女は子犬の墓を建てた。捨て犬であれば役所で引き取ってもらえるが、それは嫌な気がして、ペット専門の業者に依頼した。費用は貯金で払うと言ったら、祖父がほとんどの額を出してくれた。この件を、孫にとつて悲しいだけの記憶にしたくなかったのかもしれない。

もう二十年以上前の話だ。それでも時折ときおり、ロゼットはこうしてあの子犬の事を思い出す。

救えなかったのは彼女のせいではない。

今の彼女は、世界が理不尽で溢あふれているのを知っている。

けれど、それを『仕方ない』で済ませられるようになったら終わりだとも思う。

少なくとも、〈ハクメン〉を奪取するための襲撃計画を、仕方ないで済ませる事など出来ない。自分が見つけて、自分が戦闘機械獣せんげきかいじゆにしたのだ。それを放り出す事など出来はしない。

世界が理不尽で溢あふれていても、大人になった今は抗あらがう術すべを知っている。

責任や義務感ではない。

あの子犬の代わりでもない。

ただロゼットは〈ハクメン〉を放り出したくなかった。

悠久の時を経て、誰も自分を知らない、知る者もない時代に目覚め、独りぼっちになってしまった古代種を。

とある九尾狐の邂逅

アニメマウルペス

カム・アクロス

アニメマウルペス誕生篇 (後編)

戦端は開かれた。

奇襲も畏もなく、姿を隠す事すらせず、襲撃部隊は待ち構えていた。数は情報通り三十機ほど。なるほど、これなら策を弄する必要もないし、逆に隠密行動は不可能だろう。それらが一斉に仕掛けてくる様は雪崩のようで圧巻だが――

「……………すごい――」

ゾイドの雪崩は強力な火線によって薙ぎ払われていた。

撃つたのはドミニク・ダナーの搭乗する青い〈レッドホーン〉だ。先日のテストの時とは違い、〈ダークホーン〉と同等の装備を二セット背負うという、見た目からして重装備と化していた。目を引くのは二丁のビーム・ガトリング・ガンと、左右に配置された三連装リニア・キャノンで、それらの威力を目の当たりにしたロゼットは思わず声を漏らしていた。

だが、それでも襲撃部隊は退いてはくれなかった。生き残った機体は散開し、再び此方へと駆け出してくる。ドミニクの〈レッドホーン〉の射撃は脅威だが、敵は数が多く、同時にすべては対処出来ない。

やがて距離が縮まり、敵機も射撃を開始する。此方はユナ・アラサキの〈ベアファイター〉と、ケイゴ・タキサワの〈ブラックライモス〉も加わって応戦するが、ドミニクの〈レッドホーン〉ほど豊富な火器はなく、そもそも多勢に無勢である。一瞬で彼等の機体がハチの巣にされなかったのは、敵の狙いが古代種〈ハクメン〉の奪取だからだ。それに加え

「……………」

〈ハクメン〉のкокピットで、ロゼットはEシールドの展開に全神経を集中させていた。

機体は薄布で覆われたままだが、すでに敵の目標である古代種は起動していたのだ。

『――主任、マジパネエっす！』

『馬鹿野郎！ 無駄口はいいから、今のうちに墜とせるだけ墜とせ……ッ!!』

『――』

ユナ、ドミニク、無言だったがケイゴの順で通信が聞こえた――が、ロゼットに答える余裕はなかった。〈ハクメン〉に積まれたEシールドは特殊で、〈シールドライガー〉などのそれと違い、展開する位置をある程度自由に設定出来る。密集陣形を採っているのは、味方機を〈ハクメン〉のEシールドの庇護下に置くためだ。

彼等と襲撃部隊の間に発生するエネルギーの壁。それはよく見ると、八角形の板が集まり、いくつも重なり合って、不定形の防壁を形成している。発生面積を限定させる事で密度を高め、発生させる場所の変更も可能という高い汎用性を兼ね備えた装備なのだが――

しかし、この制御が難しい。敵の射撃の着弾箇所を見極めつつ、味方の射線を塞がないようにEシールドを展開するのは至難の業だ。今は「ハクメン」が静止しているからいいが、機体を操縦しながらEシールドを制御するのは、不可能と思える。

(誰よ、こんな装備考えたの……!?)

内心で開発者に悪態を吐くロゼット。無論、開発者は彼女自身なのだが、テンパっていて冷静ではなかったのだ。

火線が飛び交い、少しずつ敵機が減っていく。中には味方の射線に入ってしまった自滅する機体もあった。数こそ多いが、やはり寄せ集めによる急造部隊なのだろう。

膠着状態が数分も続くと、戦いは接近戦に移行した。思いのほか敵の減りは早く、その数はもうすぐ二桁を切りそうだった。

この調子なら乗り切れる——「ハクメン」を覆っていた薄布を取り払い、自らも迎撃に加わっていたロゼットは、しかしそう樂觀出来ずにいた。「ハクメン」が何か嫌なものを感じている気がしたのだ。

『——全員、気を付ける。厄介なのがいやがる』

ドミニクの緊張を含んだ声が通信に乗って届く。

「ダナーさん？」

ドミニクの通信に耳を傾けつつ、背部のマルチ・ビームキャノン・ユニットで援護射撃を行うロゼット。「ブレードライガー」のアタック・ブースターを参考に、火器と推進システムとEシールド・ジェネレーターの役割を持たせた複合兵装だったが、使い勝手は良好のようだ。

『どうしたんすか、隊長？ あと少しっすよ！』

ロゼットとは対照的に、状況を樂觀的に捉えているユナの「ヘアファイター」の強力な一撃が、「モルガ」を分厚い頭部装甲ごと貫いた。

『その少しがヤバいんだよ。あの引っ込んでる「セイバータイガー」だ！』

ドミニクの青い「レッドホーン」が、懐に飛び込もうとしてきた「レブラプター」を、抜き撃ちの如く一瞬で照準、撃墜した。

『妙な頭部をしていますね』

戦闘中でも変わらない声音のケイゴ。「ブラックライモス」の特徴である掘削機のような角が回転し、「ハンマーロック」の腹をズタズタにしているが、コクピットの彼も普段と変わらぬ朴訥とした表情を浮かべているのだろうか。

件の「セイバータイガー」は、ケイゴの言った通り頭部に特徴があった。三本の巨大な刃が、爪のように間隔を空けて並んでいる。まるで頭部から直接生えているかのよう

に錯覚させる、不気味なデザインだとロゼットは感じた。同時に、〈ハクメン〉の感じている『嫌なもの』の正体だとも。

『〈アザフセ〉だ。前に一度、戦ってるのを見た事がある』

『そんなにヤバいんすか……?』

『ああ。そんな時あ、味方でよかったって本気で思ったよ……』

ドミニクが言うには、グレンという傭兵の機体らしい。製造元不明のセイバータイガー・タイプは、機体名らしき刻印があったのだが、それはまるで名を伏せるように削られ、読めなくなっていたという。それをどう思ったのか、愛機としたグレンが〈字伏〉と名付けたそうだ。

「名前を伏せた……」

ドミニクの話聞き、ロゼットは妙に気になった。頭部に三本の刃を持つ〈セイバータイガー〉——〈アザフセ〉を造った者は、なぜ一度は与えた名前をなかった事にしたのだろうか。

『——来ます!』

それが誰の発した警告だったのか、一瞬、ロゼットは判らなかった。あの常に朴訥として、声を荒げるイメージがない青年と結びつかなかった。

ケイゴだ。

彼はロゼットを庇うように前に出ると、〈アザフセ〉の一撃を超硬度ドリルで捌き、背部の大型電磁砲を撃ち込んだ——が、あえなく躲かれ、〈ブラックライモス〉は無防備な横っ腹に強力な体当たりをくらって地面に倒れた。

『ケイゴ!? つこの!』

ドミニクが二機の〈エイガン〉を一斉射による面制圧で強引に撃破すると、背中の中重装備を強制排除し、〈アザフセ〉に突進した。〈レッドホーン〉の動きとは思えぬ加速だったが、〈ブラックライモス〉にトドメを刺そうとしていた〈アザフセ〉は、それを軽々と躲し、逆にカウンターを放った。

頭部の三本の刃が振り下ろされ、ドミニクの〈レッドホーン〉の首が胴体と離れた。

『隊長……ひっ』

〈アザフセ〉に睨まれたユナが短く悲鳴を上げた。通信からでも、彼女の恐怖は痛々しいほど伝わってきた。

「——プラズマ・スマッシュャー!」

滅多めったに使う事はないと思っていた試作兵装を呼び出す。〈ハクメン〉が四肢を広げ、口を大きく開く。此方こちらの挙動に気付いた〈アザフセ〉が、そのままユナの〈ベアフアイター〉に向かうか、回避行動に移るか迷ったのが伝わってくる。その一瞬で充分だった。

「ユナさん、下がって！」

ユナが恐慌状態パニックを起こしていないのが幸いだった。彼女は即座に〈ベアフアイター〉を離脱させ、〈アザフセ〉から距離を取った。

「……ッ！」

外気を取り込み、高圧縮プラズマ化した光弾が放たれた。

プラズマ・スマッシュャー。

荷電粒子砲に替わる装備として開発された、〈ハクメン〉の試作兵装である。威力もさる事ながら、見た目の衝撃度インパクトも大きい。初めて見た者なら面食らっても仕方がない——はずなのだが、〈アザフセ〉は恐るべき俊敏しゅんびんさで、高圧縮プラズマ化した光弾を紙一重で躲かわした。

「——くっ！」

すかさず〈アザフセ〉は攻撃に転じた。離脱した〈ベアフアイター〉に執着せず、先に〈ハクメン〉を制圧しようというのだろうか。

〈アザフセ〉の格闘兵装はセイバータイガー・タイプの通常装備であるストライク・クローとキラー・サーベル、頭部の三本の刃だけだが、卓越した乗り手ツメなら爪キバだけで事足りる。

「うぐ……っ！」

〈オート・リアクション・システムA R S〉によって、〈ハクメン〉は熟練のゾイド乗りの動きをもつて、〈アザフセ〉の猛攻を躲していく。だがそれは、搭乗者であるロゼットが意図した動きではない。〈ハクメン〉が、ただ機械的に状況を判断し、最善と思われる動きモーションを選択し、実行しているにすぎないのだ。予期せぬ方向からの急激な加重Gに何度も襲われれば、中の人間はやがて限界を迎える。〈ハクメン〉のコクピットには、マグネッサー・システムを応用した耐G座席シートが採用されているが、それにもやはり限界はある。

上下左右だけでなく、前後も加わった三次元的な、しかも不規則で激しい動きに、嘔吐感おうとと目眩めまいで訳が判らなくなっていく。

(あ、これ……駄目かも——)

直後、ロゼットの意識は途切れた。



目標のキツネ型に対し、猛攻を仕掛ける〈アザフセ〉のコクピットで、グレンは自分と愛機の境界線が曖昧あいまいになっていくのを心地良く感じていた。直接戦たたかっているのは〈アザフセ〉だが、自分自身が〈アザフセ〉になっていると、錯覚ではなく思える。

「……はあ……」

戦闘中にも関わらず、思わず感嘆かんとんの吐息といきが漏れてしまう。

〈アザフセ〉は最高のゾイド——いや、グレンにとつての相棒だ。数々のゾイドに乗ってきたが、ここまで本当の意味で一体感を得られた事は一度もなかった。比喩ではなく、〈アザフセ〉の機体からだが、自分の身体からだの延長に感じられる。今の自分は人間ではなく、巨大なトラなのだ。

「——」

突然、キツネ型の動きが鈍った。〈アザフセ〉の攻撃はまだ一度も直撃していない。

恐らく、搭乗者が気を失ったのだろうとグレンは察した。キツネ型の動きには、ずっと違和感があった。〈アザフセ〉の猛攻をよく躲かわしていたが、機械的というか、本能とは別の意味で反射的に動いているだけのような。

どういった仕組みかは知らないが、あの動きは借り物なのだ。それなら搭乗者が耐え切れずに意識を失い、お飾りとはいえ、御者を失ったゾイドもまた行動出来なくなる。

これでは、つまらない。

動かない敵をいたぶる事に興味はない。

全力で戦わなければ意味がないのだ。

グレンという傭兵は戦闘狂だったが、純粹に——人間としては欠落を抱えていても——ただのゾイド乗りだった。

「……っ!?!」

ぞわっとする感覚を覚え、咄嗟とつさに左に跳とんだ。着地と同時に、元いた場所へ〈アザフセ〉を向けると、先ほど仕留め損ねた〈ベアフアイター〉がいた。前足の爪つめを地面に深く突き立て、動きを止めたキツネ型を背に庇かばうようにして、此方こちらに向けて咆哮を上げて威圧感プレッシャーをかけてくる。

「っははー!」

愉快だ。〈ベアフアイター〉は良い機体だし、搭乗者の技量も中の上といったところだろう。だが、圧倒的に〈アザフセ〉とグレンに劣っている。それにも関わらず、相手が氣迫で立ち向かってきた事が堪たまらなく愉快だった。

勝ち負けなど、どうでもいい。ただ全力で戦う。相手が何者であっても。

それがグレンの流儀スタイルであり、唯一ゆいいつの生き甲斐かひだった。



戦況は芳かんばしくなかった。

四対三十三という彼我兵力差を覆くつがえし、よく戦ったが……相手が悪かった。

(今は〈字伏アザフセ〉と呼ばれておるのか。ふむ、因果いんぐわなものだ)

それはコクピット内で行われていたロゼット達の会話を聞き、意味を正確に把握していた。名が伏せられるものに名を与えるなら、なるほど〈アザフセ〉ほど相応しい名もないだろう。

〈アザフセ〉と呼称されているトラ型ゾイド。〈セイバータイガー〉の機体ボデイを纏まとっているが、あれは本来、まったく別の存在だ。強大な力を持った九尾のキツネ型ゾイドを滅すため、ただそれだけのために造られた狂気の産物。

(未だ現世いまに残り、姿も名も変わり、それでも我を滅ぼさねば気が済まぬか……) 何をしたと言うのだろうか。

ただ強大な力を持っていただけで、畏おそれられ、忌いみ嫌われた。迫害され、子供達を皆殺しにされた。

強いというのは、それだけで罪なのだろうか？
弱いというのは、それだけで免罪符なのだろうか？

永い時を生き、文明が変わり、人間も変わってしまった。
それでも、人間という種そのものを憎まずにいられたのは、自身が幼獣だった頃の記憶に起因する。

幸せな時間だった。文明は緩慢かんまんな終わりへと向かっていたが、そこに悲哀はなく、人々は残された時間を穏やかに過ごしていた。

(……感傷か、未練か、どちらでもよい)

また逢あえた。別の人間だとは判っているが、それでも、懐かしいあの声に。
だから――

(私の力、今は汝なんじのために使おう――ロゼット)



軽い振動。続いて光が瞼まぶたの向こうから差し込んでくる。

あれはそういう存在だ。

「……気をしつかり持て。あいつは俺達の事なんざ見ちやいねえ」

「っー」

ドミニクの声にはととなる。彼もまた〈ハクメン〉から発散される威圧感に圧倒されていたが、それでもケイゴを気遣う程度の余裕はあるようだ。

ケイゴはドミニクに向けていた視線を戻し、覚醒した古代種に再び傾注した。それから先は、今度こそ目を離す事など出来なかった。

「つてえ……」

〈アザフセ〉の刃やいばによって斬り飛ばされた〈ベアフファイター〉の頭部が地面に落着すると、ほどなくしてユナが風防窓を解放して這い出した。見えない場所に打撲くらいはあるかもしれないが、大きな怪我は見当たらぬ。

「……………えー」

外の様子を窺うかがおうとした矢先、ユナは信じられないものを見た。停止していた〈ハクメン〉が再起動し、〈アザフセ〉とかいうセイバータイガー・タイプと互角にやり合っている——いや、むしろ押しているのではないか。

攻勢をかけているのは〈アザフセ〉のだが、それを躲かわす〈ハクメン〉の動きには余裕が感じられる。先ほどまでの〈オート・リアクション・システム〉頼りの模倣コピーではない、まるで最初から自身の動きモーションであったかのように自然で、アレンジさえ加わっているように思えた。

「主任、やつぱパナイわ……」

目標であるキツネ型の動きが変わった。

「」

〈アザフセ〉の爪ツメが、牙キバが、頭部やいばの刃こてしとが、悉かわく躲される。先ほどまでの、借り物の動きではない。キツネ型が、その搭乗者が、自らの意思で機体を動かしている。

グレンにはそう感じられた。

「」

何が起きた？
なぜ変わった？

先ほどの咆哮と共に向けられた強烈な殺気は何だ？
判らない。

だが――

「――っはは！」

グレンは苛立つどころか、悦びに震えていた。

彼が待っていたのはこれだ。この高揚感だ。

〈アザフセ〉の全力を出して戦える瞬間を待っていたのだ。

先の戦争が終わり、戦場の様相は変わってしまった。ヘリック共和国軍とガイロス帝国軍が同盟を結ばなければならなくなったほどの戦場を経験した後では、小規模な局地戦ばかりの昨今の戦場では、まるで食いでがない。

彼が恐れるのは死ではない。

このぬるま湯のような戦場しかない世界で、満たされぬ想いを続ける事だ。

それがようやく満たされようとしていた。

「ふうッ！」

攻める。躲かれようと、いなされようと、ひたすら攻め手を緩めない。

(……判るぞ、〈アザフセ〉。お前はあれを駆逐するために生まれてきたんだな)

愛機の感情が流れ込んでくる今なら判る。

理由など知らない。

死力を尽くして戦いたいグレンと、キツネ型を斃したい〈アザフセ〉の目的が合致しているのだ。他の事などどうでもいい。任務など忘れてしまった。

「判るぞ！」

頭突き的要領で〈アザフセ〉の頭部を振り下ろす。すでに何度も躲されている攻撃だが、今回は違った。

頭部に鉤爪のように生えている二本の刃が――伸びた。

元の長さの約五倍。先ほどまでの感覚でいれば躲しきれない。

グレンは、キツネ型の頭部に必殺の一撃が叩き込まれる未来を想像し、勝利を確信した。

同時に、この心躍る時間の終わりに一抹の寂しさを覚えた。

しかし――

「——なんだとっ!?!」

キツネ型は必殺のはずだった一撃をバックステップで躲した。あたかも「アザフセ」の刃やいばの特性を知っていたかのように——むしろ、でなければありえない。

離脱と共に後方を向いていた砲塔が此方こちらを向き、発射されたビームは地面を直撃した。外れたのではなく、目的は着弾による煙で視界を塞ぐ事ふさだったのだろう。

直後、グレンは全身を斬り刻まれるような痛みを感じた。精神リンクによるゾイドとの感覚共有だと理解し、同時に全身の感覚と意識を刈り取られた。その一瞬、ワイヤーの先端で蠢うごめく、紫色の光を放つ鏃やじりのようなものが見えた気がした。

悪魔の尾のように見えたそれが、彼がこの世で最後に目にしたものだった。



戦場からやや離れた地点に、じつと息を潜めている者達がいた。

サチエ・アサマが手配した『保険』である。彼等の存在はグレン達にも知らされておらず、襲撃部隊だけで目的を達せられれば、彼等の出番はなく、人知れず撤収する予定であった。

「襲撃部隊の全滅を確認。プランBに移行する」

最小限の機能だけを立ち上げているため薄暗いコクピットで、男は言った。

望遠モードのため画質はかなり荒いが、戦場の様子を映した監視モニターには古代種と、バラバラになった「アザフセ」の残骸が映っている。画質が悪すぎて何が起きたのか詳細は不明だが、再起動した古代種によって、見えない刃で斬り刻まれたように男には見えた。

『——了解』

男の指示に、通信を介して三つの応答が返ってくるのを確認すると、彼は機体の隠蔽いんぺいを解いた。光学迷彩が解除され、灰色の低視認性塗装ほじりを施された「ガンブラスター」が姿を現す。アンキロサウルス型の重砲撃型ゾイドである。その数は四機。

プランB。

それは、目標の奪取に失敗した際、伏兵による集中砲火で古代種を破壊するというものだった。

この襲撃計画に、すでに莫大な費用をかけ、危ない橋も渡っている。奪取に失敗して終わりでは済まないのだ。せめて「L. C. ファクトリー」に痛手を与えなければ。

こんな事にどんな意味があるのか、「ガンブラスター」の搭乗者達は知らない。傭兵はクラリアント・オーダーの依頼者の命令に応えるだけだ。

「作戦開始——」

その言葉が何を意味するかなど知らないように、男は一切の熱を含まぬ声音こゝろねで告げた。操縦そどうじゆうかん桿かんの引き金を引き、ハイパー・ローリング・キャノンが発射される。いくつもの火器を束ねたような形状のそれから、様々な実体弾パレットと光線ビームが次々と撃ち出されていく。

古代種に向けて四ヶ所から同時に行われる十字砲火クロスファイア。並みの防御手段で耐えられるものではない。

「……………」

全弾撃ち尽くしたハイパー・ローリング・キャノンが沈黙する。休みなく撃ち続けたため、銃身が焼け付いて使い物にならなくなったものもあるかもしれない。だが、補給と修理は保証するので徹底的にやれとお達したっだ。

着弾地点が遠いため望遠カメラが捉とらえている映像は画質が悪いが、それでも様子は充分に判る。でなければ、そもそも砲撃すら出来ない。四機の重砲撃型ゾイドによる十字砲火クロスファイアによつて、戦場はもうもうと分厚い煙が立ち込めている。どれだけ残骸が残っているか怪しいものだが、確実に結果を報告しろとも言われているため、視界が晴れるまでは帰還も出来ない。

「……………」

十字砲火クロスファイアの中心部だった地点に、何か光るものが見える。それは煙が晴れていく事で、

一對のブレイド状の紫色の光だと判った。

「な……………」

煙が完全に晴れ、男は紫色に光るブレイドの本体をようやく視界に収めた。

仁王立ちするキツネ型のゾイド。九本もの尾を持ち、そのうちの二本が紫色の輝きを放つブレイドの正体だった。

『——も、目標は健在……………!?』

『——馬鹿な!』

古代種は健在だった。煙の晴れた、爆心地と化した戦場に、それは確かに立っていた。やがて紫色に光るブレイドが消失すると、九つに展開していた尾は収納され、古代種は此方こちからを睨にらんだ——ように男は感じた。

ありえない。この望遠カメラでようやく見える距離で、正確に男の搭乗する〈ガンブラスター〉を見つけ、敵意を向けるなど…………。

『——どうする!? 指示を!』

どうするか? 当然、撤退に決まっている。すでに彼等の〈ガンブラスター〉は戦える状態ではない。仮に戦闘可能な状態だったとしても、男は今すぐにも逃げ出したい気持

ちだった。

さっきのは警告だ。

『まだ続けるのなら、全員無事には帰さない。その覚悟があるか?』——という。

冗談ではない。グレンとは違うのだ。傭兵は割に合わない仕事はしない。

だが、それでも矜持プライドがある。このまま任務を果たさず逃げ帰るのか?

懊惱おののする男を救ったのは、緊急時の連絡に使われる長距離通信だった。

「——速やかに撤収する」

通信内容を確認した男は、すぐさま指示を実行した。



「……襲撃部隊は撤収させたわ」

〈アサマ製作所〉 社長室。

社長席に座るサチエ・アサマは、突然の訪問者にそう告げた。面会アの約束もなく、扉打ノックすらせず踏み込んで来た彼女は、無言で数枚の紙と写真をサチエの執務机の上にバラ撒まぎ、表情ひとつ動かさずに言った。

襲撃部隊を今すぐ撤収させる——と。

机にバラ撒かれたのはへL. C. ファクトリー―襲撃に関する証拠物件―雇やとった傭兵の一覧表リスト、報酬の振り込み記録、サチエが数名の傭兵と写っている写真。写真は昨日、古代種が搬送されると聞いて、計画内容の変更を直接会って伝えた際のもので、当然だが隠し撮りである。

どれも決定的な証拠にはならない。だが、これは『ここまで掴つかんでいる』という意味でもある。つまり、『調べればこれ以上の証拠も見つけられる』という事だ。少なくとも、彼女はサチエがへL. C. ファクトリー―襲撃計画の首謀者だと知っている。こうして乗り込んで来た以上、この場合は凌しのげても、逆らえば今後な何をされるか判らない。

「……あなた、たしかへL. C. ファクトリー―と提携している民間軍事会社P M Cの傭兵よね? 要求は——ふぐっ!?!」

サチエは最後まで言葉を発する事を許されなかった。訪問者が流れるような動きで抜いた拳銃を、一切の逡巡なく口腔内こうくわうに強引に捻ねじ込まれたからだ。

「単刀直入に言おう——二度とへL. C. ファクトリー―に関わるな。ロゼット・ユダール個人にもだ」

怒鳴るでもなく、淡々と言い聞かせるような声音こゝろねで、訪問者はサチエの耳元で続ける。

無論、愛用の自動拳銃〈ガバメント〉はサチエの口に収めたまま。

「そうすれば、この件は口外しない。今後一切の追及もしない。どうだ、破格の条件だろう？」

「……えあうあ——」

「何を言ってるのか判らん——ああ、すまない。これでは無理か」

訪問者は気付かなかったといった様子で〈ガバメント〉の銃口をサチエの口から引き抜いた。

直後、室内に銃声が響いた。

「……………」

サチエは左を向かされた状態で執務机に頭部を抑えつけられ、目の前数センチ先では、天板に穴が穿たれていた。一瞬の事で、彼女は何が起きたか理解出来なかった。その分、理解が追い付いてくる頃には、じわじわと恐怖が効いてくる。失禁し、表情を引き攣らせたサチエの様子に、充分に警告は伝わっただろうと判断した様子で、訪問者は社長室を堂々と出て行った。



「いやあ、ファルナはカッコイイな」

サチエ・アサマの社長室を後にした訪問者——ファルナ・イカルガを、リックの無駄に良く通る美声が出迎えた。

「お前の口にも捻じ込んでやろうか？ なんなら弾も二、三発ぶち込んでやる」

やや苛立ちを含んだ表情と声で、ファルナはリックに睨みを利かせた。

抜き身の刃のような人物である。百七十センチに届きそうな長身の美女のだが、まずはその雰囲気印象に残る者も多いだろう。

「そいつは勘弁してほしいな。僕はぶち込まれるより、ぶち込む方が専門だからね。なんなら勝負するかい？ 夜のドッグファイトなら望むと——」

「お前は反省という言葉を知らんらしいな」

流れるような自然な動作で〈ガバメント〉を抜くと、ファルナはリックの額に銃口をぐりぐりと押し付けた。こゝもファルナという女性をイラつかせる事が出来るのは、ある意味で称賛に値する。

「今回の諸悪の根源がお前だと知れば、さすがのロゼットでも見限るぞ」

リックによって（L・C・ファクトリー）襲撃計画の情報を得たロゼットは、真つ先にファルナに相談した。二人は仕事仲間であると同時に、プライベートでの付き合いもある幼馴染で、ロゼットはファルナに絶対の信頼を寄せている。相談を受けたファルナは即座に情報提供者であるリックを疑い、彼はあつさりと古代種などの情報をサチエに売った事を認めた。

「ロゼットに嫌われるのは嫌だなあ……」

冗談めかしてはいるが、これはリックの本音だ。なので、彼はファルナと共に奔走し、襲撃計画の証拠を集めた。結果的に未然に防ぐ事は叶わなかったが、確認したところロゼット達は無事だと知らされたのでよしとすべきだろう。

「でもまあ、ロゼットならなんとかしちゃうと信じていたからこそその行為であつてね」

「いくら儲けた？」

「そりゃあもう、がつぼりと」

「……………」

蔑みと諦めを多分に含んだ視線をリックに送り、ファルナは終始無言で佇んでいた男性に向き直った。〈アサマ製作所 社長補佐である。

「礼は言いませんよ」

「当然です。むしろ、礼を言うのは私共の方ですから……」

ファルナより明らかに年上の中年男性が、恐縮した様子で首を垂れた。この短期間で襲撃計画の証拠となる情報を集められたのは、彼の協力を依るところが大きい。見返りは今回の件を公にしない事だった。サチエを止められないなら、身内の恥を晒してでも第三者に頼る。彼にしてみれば情けない話だろうが、ファルナは彼を内心で評価していた。

だからこそ、今回の件はこれで手を引く決心がついた。そうでなければ、サチエをこのまま五体満足で生かしておくはずがない。報復とは徹底的にやらねば意味がないのだから。「誰しも、身内には甘くなるものですよ」

「ありがとうございます……くっ、うう……」

この社長補佐にとって、サチエは彼女を裏切る事になつても護らねばならない存在なのだろう。ファルナにとって、ロゼットがそうであるように。



ようやく終わった。

〈アザフセ〉を倒し、レイアウトEシールドでなんとか〈ガンブラスター〉の集中砲火を防ぎきった。

〈ハクメン〉のEシールドは特殊で、通常は機体の周囲数メートルの任意の場所に防壁を展開させるものだが、背中のマルチ・ビームキャノン・ユニットを装備する事で『レイアウトEシールド』の使用が可能となる。これによって展開可能範囲が機体の周囲五十メートルまで拡大し、用途も格段に広がり、最大で四枚の同時展開が可能となるが、効果時間は十秒ほどと極めて短い。〈ガンブラスター〉四機からなる砲撃には耐えきれたが、かなりギリギリだった。あれ以上砲撃が続いていれば、特殊塗装装甲の〈ハクメン〉はまだしも、各々の愛機のコクピットに避難したドミニク達は蒸発していた事だろう。

実戦がどういものか、ロゼットは身をもって感じた。

正直——しんどい。

「あ〜……」

思わずだらしのない声が出る。普段、運動らしい事などしないため、精神面だけでなく肉体面にも疲労が著しい。精神リンクを行う事で〈オート・リアクション・システム〉の負荷は大幅に軽減されたが、それでも皆無とはいかない。耐Gシートを強化するか、少しは身体を鍛える努力をするべきかもしれない。

「……だらしがないぞ。シヤキつとせよ」

脱力しきつて、四肢を投げ出すようにして仰向けになっていると、遠慮がちにロゼットを叱る者がいた。

少女——と呼んでいいのだろうか。十代半ばの可憐さと、二十代の美しさと、もつと上の落ち着いた貫禄さもある。もつとも、人間の年齢を当てはめる事に意味はない。彼女はゾイド——それも悠久の時を生きる古代種なのだから。

此処が仮想空間と言われる場所なのだろう。ゾイドとコミュニケーションを取るための場所で、其処でゾイドは人間の姿を採るらしい。ハンも、リンも、二人とはゾイドへの接し方が違うファルナも、この現象を体験しているらしい。

「私、結構だらしがないんだよね。だから、そうやって叱ってもらえると嬉しいなあ」

ロゼットの素直とも開き直りとも取れる言葉に、〈ハクメン〉と呼ばれている古代種の仮想人格は困ったような苦笑をした。

極端に長い黒髪で、前髪を含め、毛先がまっすぐに切り揃えられた特徴的な髪型。顔立ちも東方大陸人に近いので、神社に仕える巫女さんっぽい。身に付けているのも和装で、上衣下裳と呼ばれる民族衣装。物語に登場する『天女』の衣装と言えは想像しやすいだろうか。

「良い場所だね」

イメージで言えば洞窟どうくつに近いが、並みのリビングほどの広さがあり、湖面のように揺らぐ天井からは、月明りのような光が差している。まるで海底にいるようだ。

「殺風景であろう?」

「ううん。落ち着くよ」

ロゼットが身を起こし、更に立ち上がって答えると、〈ハクメン〉の化身は少し俯うつむいて「然様さようか」と呟つぶやいた。

「ありがとう、力を貸してくれて。精神リンクって、ゾイドが搭乗者を認めてくれないと出来ないんだよね」

一度は〈ハクメン〉の激しい動きに限界を迎えた。だが、意識を取り戻してからは、それがなかった。不思議な全能感のようなものに満たされて、自分が〈ハクメン〉そのものになったようにさえ感じた。〈アザフセ〉と戦っている時、〈ハクメン〉が次にどう動くか、どう動きたいのかが判った。それが自分の思考であるかのようにすら感じた。だから戦えた。〈アザフセ〉に勝てた。その後、難しいと思われたレイアウトEシールドの制御も完璧に出来た。

あれが本当にゾイドとひとつになるという事なのだろう。ゾイド乗りが夢見る境地に、まさか自分が至れるなどとは、ロゼットは夢にも思わなかった。

「……当然の事をしたにすぎん。我われとて、あそこで死ぬ気はなかった」

照れ隠しなのか、〈ハクメン〉の仮想人格は俯うつむいたまま、髪すきまの隙間から窺うかがうようにロゼットを見上げている。

「……別になんじ 君のために力を貸した訳ではない」

「そうなんだ……ふふっ」

上目遣いで素直じゃない事を言う姿がおかしくなり、しかし笑ってはいけないと我慢して、結局ロゼットは笑ってしまった。

「……何がおかしいのだ?」

馬鹿にされた——というより、見透かされたと感じたのだろう。それでも〈ハクメン〉の化身は俯うつむきがちで、ロゼットとまっすぐ視線を合わせようとしない。

「う〜ん……えい」

「——っ!？」

両側から挟はさまれるように手を頬ほおに添そえられ、〈ハクメン〉の化身は半ば強制的に俯うつむいていた顔を上げさせられた。当然、眼前のロゼットと同じ視線で向き合う事になる。

「な、何を——」

「ごめんね。ちょっとこのままでお話ししようか」

「ぬう……」

気圧されたように〈ハクメン〉の化身は了承した。観念したという方が正しいかもしれない。
ない。

「……ねえ。どうして、そんな風に見上げるの？ あなたはとても強くて、私を見下ろす事だって出来るはずなのに」

機械化されたゾイドは搭乗者なしでは動けない。強い戦闘能力を得た代償に、自由を失うのだ。だが、〈ハクメン〉との精神リンクを通して、古代種がどれだけ強い存在かを知った。かつて猛威を振るった〈真オーガノイド〉のように、搭乗者を壊す事さえ出来るのではないか。

「……………」

「私が怖い？」

「……………」

「それとも、嫌い？ 私があなたを見つけて、眠っていたのを起こしてしまったから……？」
それならば仕方がない。〈ハクメン〉は十万年以上の昔、その力を恐れた当時の人類に迫害され、子供達を殺され、最後は自ら化石化した。このままずっと、世界の終りまで眠り続けるつもりだったのかもしれない。それをロゼットは邪魔してしまったのだから。

「それは違う！」

〈ハクメン〉の化身が声を荒げた。

「……違うのだ。我は汝を恐れてなどおらぬし、嫌ってもいない」

顔が動かせないため、視線だけを俯かせる様子を見て、ロゼットはちくりと心が痛んだ。

「そっか」

「——？」

ロゼットが納得したように呟くと、両手の拘束から解放された〈ハクメン〉の化身は、不思議そうにロゼットを見つめた。

「嫌われてたり、怖がられてるんじゃないなら、今はそれでいいや」

理由はこれから知っていけばいい。時間はあるのだ。

「でも、これだけは知っておきたい。あなたの搭乗者は——私でいいかな？」

ロゼットはゾイド乗り——兵士や傭兵という意味での——ではない。ゾイドの闘争本能を満たしてやる事は難しい。むしろ、そんな状況になってほしくないとすら思っている。

多くのゾイドが自ら戦う意志を持っている以上、技術者であるロゼットは本来、ゾイド

乗りには相応しくないのだ。

だからこそ確認しておく必要がある。

自分でいいのか——と。

「——構わない」

あつさりと〈ハクメン〉の化身は肯定した。

「えーつと……もう一回いいかな？」

「何度も言わせるな——なんじ汝がよいのだ……」

そう言つて、〈ハクメン〉の化身は再び俯うつむいた。どんな表情をしているのか、覗のぞきこみたい衝動を必死で抑えるロゼット。下手な事をして本当に嫌われたくはない。

「そうだ、名前。まだちゃんと決めてないよね」

『ハクメン』が定着しつつあるが、やはり正式名称は違う方がいい。

「ひよつとして、もう何かあるの？」

「名か……」

名前で自分と他人を識別するのは人間だけだ。だが、〈ハクメン〉のように高い知能を持つ古代種であれば、名前があるかもしれないとロゼットは考えたのだ。

「そんなものはない。必要であれば汝が決める」

一瞬、〈ハクメン〉の化身は何か言おうとしたように見えたが、ロゼットはあえて気付かないふりをした。追究するのは野暮な気がしたのだ。

「じゃあ、『アニス』でいいかな？ 正式名称は〈アニマウルペス〉で、愛称がアニス」

「アニスカ、花の名だな。たしか花言葉は……『ヒトを騙だます』だったか？」

〈ハクメン〉改め——アニスと名付けられた娘は、皮肉っぽく言った。紫色の瞳を細め、妖あやしい笑みを浮かべる様は、本当に『そういう存在』に見えてしまうから笑えない。

「そういう意味も確かにあるけど……私は『活力』とか『慈愛』って意味がぴったりだと思っただよ」

苦笑して訂正するロゼットに、アニスも「知っておったわ」と苦笑を返した。

ちなみに『アニス』という名前には、もうひとつ意味があった。幼い頃に拾った、救えなかった命。そう呼ぶ事はなく、墓石に刻んでやるしか出来なかった子犬の名前だ。

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『とある九尾狐の邂逅』ウルベス カム・アクロス・アニマウルベス誕生篇（後編）をお届け致します。

いかがでしたでしょうか？ 諸事情もあって割りと難産だった本作ですが、それに見合うというか、かなり自分でも満足のいく作品となりました。あとは読んでくれた方にも楽しんでいただければ本望です。

早いですが謝辞を。

まずは紙白さんに感謝を。アニマウルベスという素敵な作品と、その魅力的な設定に創作意欲を刺激され、この小説は出来上がりました。小説にするにあたっての質問や、監修含め、今回は普段以上にご協力を賜りました。

そして、後編（中編と分かれる前のもの）に対するご意見をくださった enigma9641 さんに感謝を。おかげで中編と分けるという判断に至れました。スペシャルサンクスで、第一話冒頭にお名前を入れさせていただきました。

最後に、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ご意見、ご感想、よろしければお寄せください。

これにて完成……！

2018 / 3 / 26 流遠亜沙

感想を書く

『Gallery of KAMISHIRO Side 2』ページに戻る